

瀬戸を巡る物語

瀬戸はやきものの代名詞である「せともの」の語源であるように、千年以上の窯業の歴史をもち、「陶都^{とうと}」とも呼ばれる都市です。その背景には、窯業生産に適した土や燃料となる樹木などの豊かな自然資源や環境に恵まれたこと、尾張・三河・美濃の三国の境界地・結節点であることにより、歴史の中で各地域の文化を受け入れてきたことなどがあげられます。

平成 29 年（2017）の 2 月に策定した「瀬戸市歴史文化基本構想」では、こうした歴史や文化を示す歴史文化遺産を総合的に把握し、瀬戸市域特有の風土も踏まえた保存活用計画を示しています。その中で、関連する文化財、文化遺産をまとめ 8 つのストーリーとしています。この 8 つのストーリーには、瀬戸の歴史文化の中心であるやきものについてはもちろん、地勢的な特徴や豊かな自然、地域の祭りを中心とした文化などが取り込まれています。このガイドブックもこのストーリーに基づいて編集しています。また、瀬戸市域は江戸時代には 18 の村々に分かれ、それぞれ独自の風土や文化を形成しています。そこで、地区ごとに文化遺産や文化施設をまとめて紹介することとしました。このガイドブックを片手にまちを巡っていただき、それぞれの地区の風土や歴史、人を感じていただき、「瀬戸を巡る物語」としてこの 8 つのストーリーをたどっていただければと思います。



陶土・珪砂採掘場（2004年撮影）



窯垣の小径



ストーリー① 陶器のふるさと～せとものの誕生～

陶祖藤四郎と瀬戸の土

瀬戸窯では、10世紀中ごろに市域南部の^{ひろく}て 広久手第30号窯で操業が開始されて以来、現在に至るまでやきものがつくり続けられています。瀬戸市のやきものを語るうえで欠かすことができないのが、陶祖^{とうそ}加藤^{かとう}四郎^{しろう}左衛門^{ざえもん}景^{かげ}正^{まさ}（藤四郎）です。藤四郎は曹洞宗の開祖^{どうげん}道元禅師にしたがって中国に渡り、やきものの技法を学んで帰国。瀬戸でよい土を発見したという伝説が残っています。慶応3年（1867）には陶祖を顕彰する六角陶碑が建設されました。昭和37年（1962）から現在まで藤四郎の遺徳を偲ぶ祭りとして「せと陶祖まつり」が開催されており、市民にとって陶祖藤四郎は精神的なシンボルであるといえます。



六角陶碑

やきもののブランド化

12世紀の終わり頃に誕生した「古瀬戸」は、中世の日本における唯一の施釉陶器として全国各地に広がり、国産高級施釉陶器としてのブランドを確立しました。

戦国時代には、織田信長がやきものの地位をさらに高めるために茶陶をブランド化するとともに、陶器産業の保護政策を行いました。その後、瀬戸焼の生産拠点が美濃へと移動し、「瀬戸山離散」^{せとやまりさん}とも呼ばれましたが、それは信長の美濃への進出にともなう移動でした。この時代に「瀬戸」がやきもの生産地のブランドとして認識されるようになったと考えられます。



古瀬戸瓶子（個人蔵）



ストーリー②

せとものの産業革命～磁器生産の開始と発展～

磁祖民吉が広げた磁器生産

瀬戸の窯元の次男として生まれ、家業の窯業を継げずにいた加藤民吉^{かとうたみきち}は磁器の生産技術習得のために熊本県の天草^{あまくさ}や長崎県の佐々^{さざ}でおおよそ3年間の修業をつみ、文化4年（1807）に瀬戸へ戻ります。民吉が磁器生産にかかわる土の精製法から焼成に至る技術や工夫を瀬戸へ伝えると、磁器生産の技術が向上し、瀬戸の磁器は飛躍的な発展をみせます。この頃の製品は、尾張藩による蔵元^{くらもと}制度のもと、御蔵会所^{おくらかいしよ}から藩の御蔵に送られた後、さらに江戸・大坂・京都の三都などへ流通し、瀬戸の磁器製品の流通量は、まもなく肥前磁器を凌いだといわれています。こうして瀬戸の磁器製品が日本全国に流通していくこととなり、「せともの」が全国区のやきものとして認知されるようになっていきました。



加藤民吉像

瀬戸の産業革命

江戸後期から近代にかけて、瀬戸窯では生産技術の改良による品質や生産力の向上が図られていきます。明治中期以降には、銅版転写技術の導入や、電気の使用開始にともなう動力機械の使用など、大量生産を行うための環境が整っていきます。加えて、薪を使う窯から、大正期には石炭窯が、昭和になると重油窯やガス窯などが登場するなど、瀬戸窯ではその時代に即した新たな窯を導入していきました。また、戦時中の代用品生産からは、割れにくいやきものの開発や型による成形技術などの技術の進歩がみられます。



古窯（瀬戸染付工芸館）



ストーリー③

やきもののまちから Creative City へ～伝統と革新～

陶芸の都・瀬戸

瀬戸は世界の陶都であるとともに陶芸の都としての顔ももっています。千年もの永い間、連綿とやきものづくりを行ってきた産地は日本のみならず世界的に見ても瀬戸しかなく、その中で先人たちは、実用性だけでなく、やきもののフォルム（形状）や図案などに創意を加え、いかにその時代の要求するものを表現するかという努力を続けてきました。特に、江戸時代の18世紀以降には、作者の銘を入れた一品制作的な作品が数多くみられ、明治・大正期には、やきものの芸術性を高めるという考え方が徐々に現れ、陶芸家と呼ばれる芸術家が登場しました。そして、昭和11年（1936）には、「瀬戸陶芸協会」が創設され、約50名の瀬戸在住の、分野が異なる陶芸家が一致団結して結集したことは画期的なことでした。80年もの歴史を有する陶芸団体は世界的にみてもこの瀬戸陶芸協会だけであり、まさに瀬戸市の誇りといえます。



瀬戸陶芸協会展（ギャラリーひまわり）

イノベーション（技術革新）そして創造へ

瀬戸では時代ごとにイノベーションが行われ、「せともの」は飲食器からノベルティ、^{がいし}碇子、ファインセラミックスなど新たな分野へ裾野を広げるとともに進化を続けてきました。また、常に外部の人を受け入れる土壌があったことから、多くの「ツクリテ」（ものづくりに携わる人々など）が瀬戸に集まり活動するという動きが生まれ、新しい瀬戸が形づくられてきました。



北川民次陶壁（図書館）



ストーリー④

まちとなりわい～職人文化とやきものが息づくまち～

職人文化のまち

陶磁器生産は、鋳業者、ロクロ師、絵付師、焼き手、^{かまつ}窯築き、荷造り、原型師等の専門化された各種の職人の共同作業によって成り立ち、個々人の技量に応じた仕事がそれぞれに存在し、職人としての自負を持っていました。瀬戸は職人氣質からくる金離れの良さ、気前の良さから「尾張の小江戸」とも呼ばれ、窯元たちの商談や接待などが行われる料亭や旅館などが軒を連ねる豪華なまちであるとともに、職人のまちとしても知られていました。



旧山繁商店

やきもののまちの風景

瀬戸川の南北両岸の斜面地を中心として、窯道具を積み上げた塀や擁壁が、江戸時代末から造られ、瀬戸では「^{かまがき}窯垣」と呼ばれています。時代の変遷とともに石垣やコンクリート擁壁に変えられているものも多い中、瀬戸ならではの特徴的な景観を形づくっています。何度も使用されてきた窯道具を緻密に積み上げた窯垣は、独特の風合いを有しており陶工の血と汗がこもった瀬戸市の顔ともいえるものです。窯元たちの大きな資本の下で鉄道などの都市インフラも整備され、皇族も逗留された旧山繁商店の離れのような贅を尽くした施設も窯元たちによって造られました。昭和初期の鉄筋コンクリート建物についても、テラコッタタイルを随所に配した重厚なビルなど陶都瀬戸ならではの多様な建造物が特徴的です。



窯垣の小径



ストーリー⑤

街道と交流～尾張・三河・美濃の三国の境～

尾張と美濃・三河の争いの舞台となった城

瀬戸には伝承地も含めて 24 か所の中世の城館跡があり、なかでも名古屋から東濃を經由して信州飯田まで通じる信州飯田街道の要所にあたる品野地区にあった品野城・桑下城は、戦国期に織田氏と松平氏・今川氏が攻防を繰り広げた地として伝わっています。文明 14 年（1482）の大槇山から安戸^{やすど}坂^{ざか}にかけての合戦では、永井（長^{なが}江^い）民部^{なぐさ}が、松原^{まつばら}広長^{ひろなが}を破っています。その後、永井（長江）民部らは今川義元支配下であった三河の松平家の臣として品野の城を守り、織田氏の勢力と永禄 3 年（1560）桶狭間の合戦頃まで攻防戦を繰り広げました。



桑下城跡（手前）と品野城跡（奥）
（愛知県埋蔵文化財センター提供）

街道の往来による交流

古くは、古墳時代に広域の交流の跡を偲ばせる遺跡がみつっていますが、三国を結ぶ街道が江戸時代に整備されたことにより、人・物の往来は頻繁となりました。名古屋城と尾張初代藩主徳川義直の廟所が築かれた定光寺を結ぶ「殿様街道」は歴代の藩主やその名代が折にふれ墓参に訪れました。また、「信州飯田街道」は中山道や下街道に次いで利用された名古屋と信濃を往来する脇街道で、近在の農民等が中^{ちゆう}馬^まと呼ばれる陸送稼ぎを行ったことから「中馬街道」とも呼ばれました。



源敬公（徳川義直）廟



ストーリー⑥ 自然との共生～豊かな自然とその再生～

オオサンショウウオが生息する豊かな自然

里山の風景が美しいのは、人々の暮らしとともにあるためです。^{しもは だがわ}下半田川町の^{じゃがほら}蛇ヶ洞川では、国の特別天然記念物であるオオサンショウウオの生息を里山が守ってきました。そこには水田と丘陵、川によって形づくられた里山の景観が残っています。また、江戸時代の『尾張名所図会』には、自然の造形である珍しい風景―奇観―としての名所として、目鼻石や石樋といった特徴ある景観が紹介されています。里山は、自然と人の織りなす風景を今日まで伝えるとともに、特異な景観が人々を瀬戸へといざなってきました。



オオサンショウウオ

^{はげやま}禿山からの再生

やきもののづくりには大量の木材が必要です。瀬戸では江戸後期から明治期にかけて禿山が広がり、禿山からの土砂流出も頻発していました。それを防ぐために実施されたのが植林です。すでに江戸時代から行われ、明治期以降は、オランダの治山工法を導入し、デレーケによる調査や、東京帝国大学雇教師ホフマンの設計による砂防工事が進められ、今日の森林地が形成されました。当時の工法はホフマン砂防遺構群^{はぎごてん}や萩御殿周辺でみることができ、東京大学演習林生態水文学研究所では現在も水量の観察が続けられています。



ホフマン砂防遺構群



多様な地域の祭り

江戸時代の猿投神社信仰等として神社へ飾り馬（オマント）を奉納する行事として始まった警固祭り^{けいご}は、主に三河西部から尾張東部で行われ、瀬戸市内では山口、菱野、本地、今村など市域南部で行われています。オマントの標具^{だし}は村ごとに異なり、標具にまつわる言い伝えがそれぞれに残っています。

品野祇園祭^{ぎおん}は、尾張地方でみられる津島社の天王祭に山車を出した祭りを原型とし、神武天皇像等三体の人形がのる山車をやぐらに見立てた盆踊りへと、独特の変化をしてきました。中馬街道沿いには各種露店が立ち並び、一年を通じてこの地区最大の賑わいとなります。



菱野のおでく警固祭り
(市指定無形民俗文化財)

やきもの祭り

陶祖にかかわる祭礼のせと陶祖まつり、磁祖にかかわる祭礼のせともの祭は、瀬戸の祭りとして大きなもので、せともの祭は年間で最も多くの人々が瀬戸を訪れるイベントとなっています。これらの祭りは、旧瀬戸村の信仰と「せともの」の全国的な知名度が複合して生まれたものです。また、陶磁器販売市は売り手と買い手が直接つながる機会を生み出しています。地域の祭りが瀬戸市のアイデンティティでもあるやきものを全面に打ち出すことにより、全国から多くの人々が訪れるイベントへと成長しています。



せともの祭

★ストーリー⑧ 世界に羽ばたいたせともの～ Made in Seto ～

アール・ヌーヴォーに影響を与えたせともの

幕末以降、瀬戸においては輸出陶磁器の開発・生産が積極的に行われてきました。当時欧米を中心に開催されていた万国博覧会へ出品された瀬戸の作品は、数多くの賞を受け、高い評価を得ていきます。このような海外からの高い評価が、輸出陶磁器生産の進展に大きく寄与することとなりました。

当時の作品の特徴は、水墨画のように写実的かつ繊細な濃淡で描かれた「自然描写」を中心とした画が特徴で、それまでの西洋にはなかった独特の世界観を醸しだしていました。これらの作風がのちの西洋における美術工芸の新たな潮流となるアール・ヌーヴォーにも影響を与えていったことは特筆すべきことです。



染付花鳥図獅子鈕蓋付大飾壺
(初代 川本桝吉作)

瀬戸の新たなやきもの～セトノベルティ～

大正期には、釉薬を掛けずに締焼したかわいらしい顔の幼児の裸形人形である「ビスク人形」がアメリカに輸出され始めました。これが戦後の瀬戸を牽引した「セトノベルティ」（陶磁器製の人形・置物など）の始まりです。セトノベルティは多くの分業体制のもとで生産され、その労働力として多くの市民が関わり、集団就職の受け入れなども行われ、一大産地を形成しました。高品質のノベルティが大量にアメリカに輸出され、戦後の瀬戸窯業発展の中心的役割を果たしました。



パーティの前（ペア）
(株式会社丸山陶器作)

瀬戸の地区区分

現在の瀬戸市は、江戸期の18の村々からなっています。これらの村々は、明治22年（1889）以降の町村合併を経て、瀬戸市域が形成されますが、前後の歴史的・文化的背景から、7地区に区分しています。

瀬戸地区は市域中央部に位置します。瀬戸川の南北に市街地を形成しています。江戸時代には窯場が集中し、近代以降急速に町場を形成していきます。現在も市街地の中心となっています。東から洞、郷、北新谷、南新谷に細分されます。

今村地区は市域西部に位置します。瀬戸川を挟んで南北に広がり、街道（信州飯田街道・瀬戸街道）沿いにあることから陶磁器や薪炭等の運送業や宿屋・茶屋、商家などが軒を並べていました。

赤津地区は市域東部に位置します。赤津川（矢田川上流）沿いの盆地と周囲の丘陵斜面からなり、伝統的な窯場で、農業とともに陶磁器生産を主な生業としていました。

水野地区は市域北西部に位置します。東から上水野・中水野・下水野の三村に分かれ、水野川沿いの沖積地上に集落や耕地が広がっています。江戸時代には尾張徳川藩主の御狩場となり、農業主体の村でしたが、近代に入ると、窯業や陶土や瓦粘土、薪炭の運搬を行う家が増加しました。上水野村には御林方奉行所、中水野村には代官所が置かれ、尾張藩政との関わりが強い地区です。

品野地区は市域北東部の品野盆地とさらに北東の山地内にある信州飯田街道沿いの村によって構成されています。品野盆地内では、品野川（水野川上流）の上流から上品野・中品野・下品野の三村に分かれています。江戸時代には下品野村で窯業生産が行われ、近代に入ると中・上品野村でも窯業が盛んになりました。下品野村は品野地区の中心地として街道沿いに町場が形成されます。飯田街道沿いには白岩村、片草村があり山仕事中心の村でした。また、山地を挟んだ北側には上半田川村があり、近代には盃製造を中心とした窯業

も盛んでした。

掛川地区は市域北部の山間の集落で、下半田川村と沓掛村に分かれ、沓掛村は尾張藩初代主徳川義直廟所がある定光寺の門前にあたります。下半田川村では農業のほか、薪刈などの山仕事が盛んでした。また国境の村でもあるため、両村は春日井・高蔵寺方面、岐阜県多治見方面とも生活圏がつながっていました。

幡山地区は市域南部に位置します。矢田川（山口川）が東西に流れ、集落や耕作地が川沿いの沖積地上に広がっています。上流から山口、菱野、本地の三村に分かれ、農業や養蚕、窯業関連の採土や運搬、販売などが生業の中心でした。

